
いばらの君

日野枝 凜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いばらの君

【Nコード】

N8866N

【作者名】

日野技 凜子

【あらすじ】

ウィットロックはたいそう美しいと評判の伯爵である。

陶磁器のような滑らかな白い肌に、すっと通った鼻筋。

金の糸に装飾されて輝きは増し、アクアマリンの瞳は不用意にのぞき込んだ者を捕らえては話さない。

細身の体は黒のタキシードがお似合いで、その肩にはらりとかかる金髪はもはや芸術的。

そんな彼に囚われた蝶は幾百と知れど、今日も彼は不機嫌であった。

伯爵と変態

ウィットロックはたいそう美しいと評判の伯爵である。

陶磁器のような滑らかな白い肌に、すっと通った鼻筋。

金の糸に装飾されて輝きは増し、アクアマリンの瞳は不用意にのぞき込んだ者を捕らえては話さない。

細身の体は黒のタキシードがお似合いで、その肩にはらりとかかる金髪はもはや芸術的。

そんな彼に囚われた蝶は幾百と知れど、ウィットロック伯爵は今日も不機嫌であった。

「捨てろ」

――例えばそれは、キラリと光る刃物のように。

鋭利なアクアマリンの瞳を細めてルイシス・ウィットロック伯爵はそういった。

グリースはたった今主人に手渡した手紙が突き返されるのを複雑な気持ちで見つめる。

「しかし、若様。失礼ながらこの文はアリエスタのお嬢様からの恋文では……」

「それが何？まったく、ご婦人方も懲りないね。いい加減、時間の無駄だって気づかないのかな？」

暇人の考えることは分からないよ、――そうつまらなそうに大輪の薔薇があしらわれた封筒をしげしげと眺めたウィットロック伯爵はやがてそれをおもむろに暖炉に投げ入れた
グリースが「あぁっ？」そう叫ぶが時すでに遅し。
ひゅうつと弧を描いて炎の中に吸い込まれる。
あとはパチパチと火の粉が立つばかりで、手紙はあっと言う間にくにやりと折れ曲がって炭になってしまう。

「なんてことをっ!？」

顔を真っ青にしながら叫ぶグリースにウィットロック伯爵はため息をついた。

グリースを口うるさい小姑だといわんばかりのそれだが、それさえも覆い隠してしまうのが彼の美貌と言う訳で。

物憂げに細めた空色の瞳にかかるのは柔らかなまつ毛。

形のいい唇から零れた吐息はそれはそれは美しく扇情的で、その恐ろしくも無駄な色気にグリースはすっかり毒気を抜かれてしまった。

――ああ、可哀想なアリエスタ嬢。

そもそもこんなのに惚れたのが運の尽き。

『社交界いち美しく公爵よりも富む』

こんなうたい文句で噂され、様々なご婦人を手玉にとってきた彼女が女性嫌いだなんていったい誰が信じよう？

「……こつちがため息つきたいくらいですよ。まったくランジェル様を見習って欲しいものです」

「ランジェル……と言えばコジルスキー公爵お墨付きの画家か。

「あーあの女好きでフェミニストの」

最近社交界で噂になっているシンディ・ランジェルはフェミニストとして有名である。

芸術と音楽をこよなく愛するハリエンタ王国。

この国では芸術家や音楽家は人々の敬意を一身に集め、貴族は有望株を支援する。

取り分けのお気に入りには、一世代だけながら爵位まで与えてしま
うのだから果てがない。

シンディ・ランジェルは若くしてその地位に登りつめた稀代の画家
であった。

「今度若旦那様の肖像画を描きに来られるようですから、少しでも
そのフェミニスト精神を分けてもらったらどうです？」

主人の見た目は言うまでもなく、性格に難はあるがウィットロック
伯爵は有能であり、領地を治める以外にも数々の事業を成功させて
いる。

そんな彼に仕える身としてはそこのぽつとでの画家に社交界の花
形を奪われてしまうのは面白くない。

ほんの少しでいいから若旦那様が、にこりと微笑めばシンディ・ラ
ンジェルなんて目じゃない

そこでちょっとグリースは恨みっぽく主人をからかった。

特に怒るでもなくウィットロック伯爵は微笑して、遠慮しとくよ、
とそれをかわす。

「ところでそのフェミニストな画家さんはいつ来るのかな？」

「八月十七日の午後からの予定です」

「今日は何日？」

「八月十七日……わあああああっ！！」

太陽はとっくに真上を通りこして、今はティータイム。
グリースの顔は再び真っ青になる。

慌てて部屋から飛び出したおちちよこちよいな従者を見て、ウィット
ロック伯爵は不敵に微笑むのであった。

伯爵と変態？

「あぁっ！なんでこんな事につ！！」

グリースはすっ頓狂な声をあげて走っていた。

この際従者にふさわしくない真似も致し方ない。

彼の頭の中は自分の不手際で一杯なのだ。

「お客さまをお招きしておいてお出迎えにも上がらないとはなんたる失態！」

と、泣きながら走るグリース。

門番によれば、半刻も前にシンディはこのウィットロック邸に入ったとのことらしいが、未だに屋敷にたどり着いたところを見るとどうやら迷っているらしい。

大旦那様にばれたらどうなることかつ！

冷や汗は滝のように流れるばかりだった。

一つに束ねたハチミツ色のとろける様な髪が、サラサラ風に揺れる。つぶらな青翠の瞳の片側につけられた無骨で真っ黒な眼帯はあまりにもその可愛い面差しに不釣り合い。

彼は目の前の荘厳な白亜の屋敷に見とれていた。

巨大なウィットロック家の繁栄の証は見ている者を押し潰してしま
いそうな威圧感に満ちている。

そんな畏怖の念に続くのは目が凝るほどに細やかな装飾に対する尊
敬の念である。

どこからか薔薇の香りがして、シンディはへにやりと顔をゆるめた。

「お名前と招待状を確認させていただいても？」

？

いつまでも屋敷に目を奪われたままのシンディに痺れを切らした門
番が口を開く。

ハッと我に返ったシンディは使い古された革の鞆から慌てて招待状
を出す。

「ああ、これは申し訳ない。私はシンディ・ランジェル。大旦那様
にご子息の肖像画を依頼されたものです」

ぺこりと頭を下げたシンディは案外小柄だ。

端から端まで手紙に目を通した門番はキチッと礼をしてその丸太の
ような腕で門を開く。

ワンダーランドへの扉が開いたかのようだ。

シンディは躍る心でそんなことを思った。

迷路のような庭で見つけたのは白薔薇の花園。

絹のような肌ざわりが待っているのだろう。

朝露に濡れた白薔薇は透明なほどみずみずしくて、けれど気安くは触れられないほどの気高さと清純さで人を拒んでいる。

青い瞳をめいっぱい広げるシンディは、明らかにそれに魅了されていた。

「美しい」

さくらんぼ色の唇から零れた言葉を合図に、うら若い画家はキャンヴァスを広げ、柳の絵だから作られた木炭を取り出した。

木炭とぱんの耳で紡がれる芸術は、彼の魂の欠片を埋め込んだように確かな生と鼓動を感じさせる。

今、今五感で感じるすべてを閉じ込め、昇華させるように。

細かな部分を尖らせた木炭のはしっこでカリカリと音を立てて描く彼には、それ以外のことは何も見えていなかった。

それはシンディ・ランジェルの泣きながら探すグリースも例外ではない。

伯爵と変態？

薔薇を描き終わると次は葉っぱの上の毛虫に目がいった。

げじげじの体を傾けてこちらを伺っている毛虫にシンディは恍惚とした表情をした。

「・・・美しい」

よほど食べるものが多いのだろうか、肥え太ったボンレスハムのような肢体にシンディはうっとりとしながら新しいケント紙にデカデカと毛虫を描いていく。

それはもう凄まじい集中力で。

彼は美しいものが大好きだった。

その判断基準に世間一般の美醜の概念はまったくありはしない。

画家の「美」は、時として理解し難いものである。

そんなシンディの後ろで先ほどの白薔薇が棘を尖らせていたことなどきつと知る由もない。

とつぷりと日は暮れても客人は来なかった。
ついでにいうならばグリースも。

ウィットロック伯爵は領地の水害対策案の用紙をまとめて引き出しにしまう。

この案件も来週が山場だろうと、人知れず息をはく。

やらなければならないことは山のようにある。

問題はこなしでもこなしでも次から次へと湧き上がって休まる暇などない。

父の倒れた日から、若くして伯爵の地位と巨万の富を手に入れた彼には当然の義務だった。

ふと、ガラスに映った美しい顔に、ウィットロック伯爵は眉間にシワを寄せる。

ご婦人を魅きつけてやまないこの顔は、若い彼が貴族の陰謀渦巻く世界で生きるためにとても都合良く、とても不便であった。

ウィットロック家を守るために自らが何をしたかは誰も知らない。
父も母も既知の仲のグリースでさえも。

彼は急に酷い胸焼けをおぼえた。

暖炉の薪はすでに真っ黒で、部屋を照らすランプは今消した。
宵闇に浮かぶ数多の星を眺めにテラスへ向かう。

星の多い夜だった。

鈴虫の鳴き声、さわさわと揺れる木々に、遠くに見える城の小さく
ぽつぽつとした灯り。

アクアマリンのようだと言われた瞳は今は濁っているのだろうか？

ふとそんな考えがよぎった時、生ぬるい風が頬をなでる。

「おおっ！なんと美しい！」

感嘆に満ちた声に口を引きつらせたのは同時だった。

伯爵と変態？

目に映ったのは髪を一纏めに結った青年。

足元には何かを描いたような紙が何枚も散乱していて。

口を一杯に広げて遠目にもわかるキラキラとした瞳でこちらを凝視している。

黒い眼帯を見て噂で聞いたシンディ・ランジェエルだと気づき笑みを つくった。

コジルスキー公爵のお気に入り画家は平民だが、例外的に爵位を 与えられ、社交界入りを許されている。

取り入っておいて損はないと思った。

「そんなところでどうかされましたか、ミスター」

にこやかにテラスの上からシンディに声をかけると、目に見えて彼 はまるで稲妻にうたれる衝撃を受けたように震えた。

「声まで美しいなんて！！君は私の天使のようだっ！」

ウィットロック伯爵の背中にとわりと悪寒が走った。

何かがおかしいと思い始めた矢先、彼は吐き始めたのだ。

――愛の言葉を。

「ああ！この身を焦がす熱い思いはなんなのだろう？いや、答ならもうすでに分かっている……私は君の顔が好きだっ！ハリエンタ王国で1番、いや、アリストファネス大陸1、いやいや、世界で1番君の顔が大好きだ！」

顔、顔、顔、連呼されて行くうちにウィットロック伯爵の目はだんだん蔑みを含んだものになる。

――何だこの変態。

そら恐ろしいほど情熱的に己の顔にのみ愛を叫び、にじり寄ってくる青年に、ウィットロック伯爵はどん引きしていた。

誰彼構わず愛を囁くと言うのは、シンディ・ランジェルの有名な逸話であるが、まさか男の自分にまで。

守備範囲が広いなど、他人ごとのように思う。

ついでに言うのならば、ウィットロック伯爵には社交界のご婦人がこれのどこに惹かれるのかなんてサッパリだった。

「ああ、その憂いを帯びた横顔も美しい！その邪魔な布を取り払えば、どのような美貌が私を待ち構えているのだろうっ！？この月明かりだけが照らす白い肌のなんと艶めかしいことかっ！」

……つまりは服を脱げと。

ウィットロック伯爵は胸の内が生温かくなるのをひしひしと感じた。
いけない、このままでは女性不信だけに止どまらず、人間不信に陥
ってしまいそうだ。
テラスに向かいにじりよるシンディに、ウィットロック伯爵は無意
識のうちに後退していた。

そんな砂を吐きそうな口説き文句——というよりはセクハラ発言連
発時である。

「その艶やかな唇から君の名が聞きた
——うわっ!？」

どぼんつと間の抜けた音がして、変態は噴水に落ちた。

上ばかり見て歩いているからそんなところに落ちるんだ、とウィット
ロック伯爵は蔑んだ。

伯爵と変態？

頭を冷やせとよく言うが、彼は比喻でなく水で頭を冷やした。

しばし静寂が訪れ、いくぶんか落ち着いた様に見えるシンディは、次の瞬間へにやりと眉を垂れ、困った様に笑う。

「どうやら私は噴水に落ちたらしい。すまないが手を貸してはいた
だけないだろうか」

こちらの彼が平時らしい。
そのギャップに思わずウィットロック伯爵は失笑してしまった。

噴水に浸かった彼はぴよっこりと濡れた頭を水面から出している。
胸にかかる、ほどかれたハチミツ色のとろける様な髪にリチャード
は漠然と違和感を感じた。

「先ほどは失礼した。我ながらお恥ずかしい限りだ」

浮かれていた、と話すシンディの大きな青翠の瞳は今は極めて淡々
としていてひどく老成していた。

「いえ、こんな楽しい夜は初めてですよ」

にこやかにそう言いながら、ウィットロック伯爵は彼に手を差し出す。

乗せられた手が存外、小さく柔らかいことに、疑念を覚えた。

力を入れて引き上げれば、予想していた重さよりはるかに軽かったせいで二人共々倒れてしまう。

視界が反転して、草が舞った。

銀砂を撒いたような満天の星空よりも、目の前のつぶらな青い瞳が網膜にこびりつく。

冷たい水がぼたぼたと皮のベストに染みを作っていた。

どくどくと心臓の音がなったのは気のせいかな。

息を飲んだのは、その柔らかさと仄かな甘い香りに。？

彼の腕のなかにすっぽりと収まってしまふシンディに疑惑はするりと口をついてでた。

「……おんな？」

そう言うてから、ハッとしてウィットロック伯爵は口を覆う。

きょとんとしたままのシンディは上半身だけを起こしてしばらく彼を見つめた後、ああ！と、一人納得した。

「別に男と名乗ったことはないのだがね。まあ名前偽名を使わさせてもらっている」

?? ? ? ? ? ? ? ?

青翠の隻眼の少女はにかり、と齒を見せて笑う。

「初めまして伯爵。私の名はシルヴィア・ランジェル。美しきものを愛でるしがない画家です」

その顔があんまりにも無邪気で、伯爵はシルヴィアが変態だとか女だとかを忘れて呆然としてしまう。

――このずぶ濡れのファーストコンタクトに、麗しきウィットロック伯爵は後に翻弄されていくのだった。

伯爵と稀人

ウィットロックはたいそう美しいと評判の伯爵である。

陶磁器のような滑らかな白い肌に、すつと通った鼻筋。

金の糸に装飾されて輝きは増し、アクアマリンの瞳は不用意にのぞき込んだ者を捕らえては話さない。

細身の体は黒のタキシードがお似合いで、その肩にはらりとかかる金髪はもはや芸術的。

そんな彼に囚われた蝶は幾百と知れど、ウィットロック伯爵は今日も不機嫌であった。

「苛つく」

殺気が立つ彼にグリースは戦慄していた。

ピリピリする肌をさすりながら、先ほどのことを思い出す。

結論から言おう。

夕刻どきにやっと見つかったシンディ様は我が美しの主人を押し倒していた。

ウィットロック伯爵は男性である。？

だがしかし、長年連れ添ったグリースですらどきりとさせられるほど非常に魅力あふれる男性だ。

そんな彼が、――好色と噂の――シンディ・ランジェルに押し倒さ

れていたとなれば、グリースが勘ぐって叫んでしまうのも仕方がない。

さらにその常軌を逸した叫び声に使用人たちが次々と集まったものだから、二人は注目の的だった。

驚愕に戸惑い、誰もが次の行動を起こせない中、彼は颯爽と立ち上がった。

――何故かびしょ濡れ姿で。

身長はそれほど高くないし、美丈夫とは程遠い優男。

若旦那様に比べれば、――大抵のものはそうであるのだが――特別に綺麗な顔とも言えない。

しかし、その甘やかな青翠の片目に、背中にかかる溶け出したハチミツ色の髪、そして似つかわしくない真っ黒な眼帯。
アンバランスな雰囲気、あっと人目を浚う。

華美に飾り付けたご婦人すら霞ませるウィットロック伯爵から注目を奪うなんて今までにない。

さすがは若旦那様と社交界の花形を取り合うだけのことはあるものだなあ、とグリースは息を飲んだ。

「すまない。皆さんを驚かせてしまったようだ」

シンディ・ランジェルのソプラノの声はよく響いた。

変声期を迎える前だろうか、少年時代に爵位を譲り受けるとは末恐ろしいまでの才能だと、グリースはまたも感心する。

そんなことを思っていたら、一瞬シンディと目が合った。

ふわっと花が咲くように微笑されれば、ぐわっと心臓を掴まれる。

……これならば、ご婦人方が見惚れるのも、若旦那様がそっちの世界を開拓してしまうのも分かってしまう。

グリースは妙に納得がいった。

すっかり場がシンディ・ランジェルに呑み込まれた。

彼はスツと片手を倒れたままのウィットロック伯爵にさしだす。

「こんなところで騒ぎになってしまい、申し訳ない。よろしければお手をどうぞ、ミスター」

後から思えば、事態の収集に脳みそをフル回転させていたのだろう。声をかけられてようやく、ハツとしたウィットロック伯爵は、思わずベシッとその申し出を彼の手ごと叩き落とした。

無言で立ち上がる若旦那様の目にはありありと敵意が伺えた。

……手の差し出し方が女性に対するものだったというのもあるかもしれない。

「お気遣いどうも」

皮肉ったように口角を吊り上げた伯爵はシンディを見下ろす。立ち上がるとその身長差は歴然だ。

「おやおや、そんなに照れなくてもいいのに」

威圧感に身をすくめてもおかしくないはずなのに、シンディはそんなことを言ってみせた。

伯爵と稀人？

啞然としていると、「ああ！君はグリース君じゃないか！」とシンディに声をかけられてしまう。

無理矢理この舞台に引っ張り出されたようで、心臓に悪い。

しかし、自分の仕事を忘れるわけにもいくまい。
思い切って声を出す。

「シンディ・ランジェル様でございますね。本日はお迎えに上げられず申し訳ございませんでした」

気にしなくていい、とシンディはにかりと歯を見せて笑う。
人の良さそうな、という印象を受ける。

「本日からウィットロック伯爵家に滞在し、依頼を受けて頂きます。
お部屋の方に案内しますが、よろしいですか？」

「もちろんだよ」

グリースがぺこりと主人に礼をして、引率を始めたその時だった。

「ああ、そうだ」

ふと、思い出したようにシンディがくると後ろを向く。
何だろうと思っている間にも、彼は若旦那様に近づいて。

「今日は僕の方こそ楽しませてもらったよ」

そう、恋人にするように耳元で囁いた。

ーそして、

目を見開いたウィットロック伯爵。

意味深に細められた青翠の片目。

かすめるように口づけられた頬に、思わず手を当てる。

呆然とする主人には何が起こったかも分からないのだろう。

「またね、麗しの君」

颯爽と主人に背を向け、行こうグリース君と促される。

働かない頭で、言われるがままガーデンの門を潜り抜けると。

その瞬間、使用人たちの叫び声が夜を貫いた。

思い出すだけでも、お劳しい。

グリースは自らの目の端にキラリと光るものを指で拭き取った。

今朝からメイドたちは脚色された噂話を屋敷中に触れ回っているし。

医者には体の調子を尋ねられるし。

さらにはどこで知ったのか大旦那様が、男色に走るのもいいが孫の姿だけはみせて欲しいと懇願した。

各言うグリースも若旦那様にことの次第を聞くまでは腫れ物に触るような態度だったのだから、居た堪れない。

プライドの高い若旦那様にとって、昨夜の出来事はたまったものではなかっただろう。

ああ、お劳しや……

伯爵と稀人？

と、まあグリースに同情されるのが一番腹立たしい。
ウィットロック伯爵は苦虫を噛むような顔をした。

目の前の仕事に集中しなければならないと思いながらも、さっきからうわの空。

それもこれも諸悪の根源である彼女のせいだった。

『シルヴィア』

そう口の中で転がすと、あの大海原を閉じ込めた片目を思い出す。
平民の身でありながら爵位を譲り受け、性別を偽り社交界で愛を囁く謎の存在。

相当な女ったらしと聞いていた彼は彼女だった。

ひとつに言われたハチミツ色の髪、不恰好な黒の眼帯。

謎が謎を呼ぶ奇妙な女。

昨夜のことが甦るようだ。

そう、あのソプラノの声で。

『君の顔が好きだ』

あまりにも直接的な言葉は、傷口をえぐるより苛立ちを掻き立てた。

自らを表すのに『顔だけ』とは随分と的を得ていた。
そう、自嘲が洩れる。

どれだけ勉強に力をいれ、領地を治めるために心血を注ごうが、結局はそこに行き着くのだ。

――自分に群がるものたちは、この見た目に引き寄せられる。

明け透けに貴方の容姿だけが気にいりましたのよ、なんてバカ正直に言う女はいない。

愛を切々と訴えながら、その内心は自分を飾るアクセサリーにする算段があるのだ。

心が見えない駆け引き。

愛が見栄か、いい加減信じるには疲弊しすぎていた。

そして彼女は最後に残った自尊心を打ち砕く。

容姿に対してのみの愛は、中身はいらないと言われているようで、女に言うのと同じに口説くのは中身のない自分を嘲笑う。

ふいにドアがノックされ、扉が開いた。

「若旦那様、ランジェール男爵がお見えになるそうですがいかがいたしましょう」

若い彼女は勤め出したばかりだろう。

緊張に身をこわばらせながらも、そう伝える。

そんな使用人に気まぐれに微笑を浮かべた。
途端にうら若い乙女の頬が真っ赤に染まる。

「……いいよ。入室を許可する」

慌てて退室した彼女に向けるのは、穏やかな表情と正反対の感情だった。

馬鹿だと思った。

女なんて所詮こんなもの。

グリースが隣でため息をついたが、そんなことはどうでもよかった。

伯爵と稀人？

「ご機嫌麗しゅう。ウィットロック伯爵、君がまさか昨夜の麗人だったとは。運命とは結びつくものだね」

シンディ・ランジェルこと、シルヴィアは今日もまた笑顔で胡散くさい台詞を吐く。

昨夜を思い出すと、優しくする気にはなれなかった。むしろ立ち直れなくなるまで傷つけてしまいたい衝動が勝つほどには。

見た目しかないとされるのなら、逆手を取ろうと思った。

大概にして、あからさまに容姿を褒めるのは僻みか屈折した恋情だ。

どちらにしても傷つけるならそいつの容姿について触れればいい。

それはどうもと頷いてみせて、腕を組んだ。

他人に自分をどう見せれば美しいかは嫌というほど知っている。

「君は今日も男装なの？いくら見栄えがしないからって淑女なら淑女らしく着飾ってみるべきじゃないのかな」

グリースがギョツとしたのが分かった。

女と言う部分にか、自分のあんまりな物言いにか、どちらかは分からない。

「ははは、見苦しかったようで悪いな。まあ平民の出だ。そんな私がドレスを着たら余計に見苦しくてな。出来れば気にしないでくれ」

「ふーん、それなら仕方ないね。その気持ち悪い眼帯は貴女の趣味？随分と陰気だなあ」

鷹揚に笑う彼女に、私はフツと口元を緩めた。
笑いとは時に刃物よりも人を傷つける。

事実彼女の表情が一瞬固まった。

そして付け足す。

「ああ、そう。私も美しいものが好きなんだよ。趣味が同じだね」

一瞬、シルヴィアが目を見開いた。

醜いものはキライ。

左右正対象が美しいとされたこの時代、女で隻眼では嫁ぎ先も無い。
さらには偏見の対象にすらなるだろうその目は、醜さの象徴。
そのメッセージを確かに受け取ったようで、気分がよかった。

「グリース、橋の様子が見たい。アデル村に馬車を出してくれ」

すっかり興味がなくなると、立ち上がって彼女を無い物としてすれ違った。

もう話すことは何もない。
肖像画なら他に頼めばいいだろう。

きつと大差なんてない。

ああ、でもコジルスキー公爵にはうまく言っておかなければならぬいな。

次々と頭の中で考えをめぐらしていると、後ろから声がした。

「……そうなんだ」

眩かれる声に振り返る。

化けの皮がはがれた素顔に少しだけ興味が湧いたのだ。

そして、そこで私は息を飲む。

「そうだよ。美しいって素晴らしいんだ」

また瞳はきらきらと輝いていた。

宝物を見つけたかのように屈託なく、朝日にきらめく水面を思い起こさせる。

??

反比例するように私の不愉快は絶頂に達した。

「だから、私は君を描きたい。依頼されたからじゃなくて、美しいものは素晴らしくて、大好きだから！」

懸命にそう叫んだ彼女を視界にいれ、アクアマリンの瞳をずっと細める。

――滲むのは、拒絶。

「お断りするよ。仕事に私情を挟まれると厄介だ」

そう言って今度こそ振り返らずに歩き出す。

そして背中に彼女の声をあびるのだ。

「必ず描いてみせるよ！」

かくして賽は投げられた。

どんな結末が待っているかなんて知りもしないで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8866n/>

いばらの君

2011年5月9日23時34分発行